

- 9：15 ふれあいまつり主旨説明、1日の流れや注意事項等。売り場の準備。
- 10：00 おまつり開始
- 14：15 おまつり終了
- 14：40 片付け
- 15：30 振り返り～終了

◎受講生から寄せられた感想

- ・お客さんが多くてびっくりした。立ちっぱなしで疲れたけれど、やることがなくて暇な状態よりは良かったかも。
- ・たくさんの子たちと関わって楽しかった。普段から、障害があるなし関わらず、困っていそうな人がいると、「大丈夫？」と声をかけている。みんなもそういうことが当たり前になると良いと思う。

◆第5回ボランティア講座◆

第1部 講演：『“障害”とは何か——みんなでつくろう住みよい社会——

障害者差別解消法をふまえて』

講師：家平悟氏（NPO法人日本障害者センター事務局長・

障害者の生活と権利を守る全国連絡協議会事務局次長）

第2部 保護者からの発言：『障害のある我が子から見る社会』

発言者：川上朋子氏、河内恵理子氏

コーディネーター：荒井聡氏

10月23日（日）14：00～16：15 江東区総合区民センター第2会議室

参加者 33名

◎第1部 講演の主な内容

中3の時の事故で頸髄損傷となり、1年8ヶ月入院。車椅子での生活となり、何もやる気になれず、絶望的な思いでした。けれど、特別支援学校や作業所で、自分よりも重い障害のある人たちが、“何かできるように”と頑張っている姿を見て、“自分にできることは？”と、自分の障害を少しずつ受け入れられるようになってきました。その後、福祉ホームで自立生活をして、それまで母にどれだけ依存してきたか、ずっと付きっきりでどれだけ負担をかけてきたかということを感じました。自分のことはできるだけ工夫してやると同時に、介助してくれる誰にでも身を委ねられる力が大事だと思いました。結婚してからも妻や子どもに負担をかけず



に生活したいと思っていますが、実際には、家族（＝介助者と捉えられてしまう）がいるからと、介助を受ける時間数を削られるという実態があります。

このような体験を通して、障害がある人には障壁があることを痛感しました。初めはあきらめていたけれど、障害者運動に参加して学ぶようになり、“障害のある人が生きる権利は、公的な支援がきちんとなければ守れない”と考えるようになりました。日本では、障害を“その人の問題”としか捉えられない現状がありますが、環境が整備されれば、障害のある人も、その人に応じた社会での役割を果たし、自立した生活を送れるのです。

50年前、駅にエレベーターの設置を訴えたとき、「障害者のためだけに設置することはできない」と言われましたが、今では、ベビーカーや高齢者など、様々な人が利用しています。

“社会的な困難を抱えている人をサポートする”と考えれば、障害者だけでなく、社会全体にとって役立つことがたくさんあります。このように、障害問題の克服は、社会全体が発展・進歩し、豊かになることで、本来は、社会が克服していくべきことなのです。「障害者差別解消法」の中の「合理的配慮」も、このような観点から、社会全体で克服していけたらと思います。

“住みよい社会をつくる”と考えるとき、ボランティアの力は大きいです。行政も、“地域住民の助け合い”を促す方向を強めています。ただ、注意してほしいのは、ボランティアに過度な責任を負わせてはいけない、あくまでも共感して自主的にできることをすべきということです。そして、ボランティア活動だけで解決できないことは、行政や公的機関に働きかけ、きちんと公的な社会システムにしていく、そうしてこそ、障害のある人たちの権利は守られると思います。そのような活動を一緒に行なう「なかま」にぜひなっていただけたらと思います。

◎第2部 保護者発言の主な内容

☆川上氏 知的障害を伴う自閉症の息子さん（22歳）

息子は自閉症です。自閉症というと、こだわりが強く、一人であることが好きな障害と思われるがちですが、普通の人と同じように、人とコミュニケーションを取りたいと思っています。ただ、オウム返しや独特の口調だったり、表情が乏しかったり、変な声を出したり、会話が出来なかつたりするので一人であることが好きだと思われます。息子は、学齢期にまつぼっくりで仲間と一緒にいろんなところに出かけたり、一緒に食事を作って食べたりし、仲間といる楽しさを知ってきました。ボランティアさんが楽しい居場所を作ってくれたおかげで、人と関わる楽しさを知り、また遊びたい、会いたいという気持ちが大きくなったのだと思います。

そんな息子にとって、成人になった今、まつぼっくりのような場がまったくないので、家で布団にただもぐりこんでいるような日も多くなってしまいました。外出は付き添う人がいないと一人ではできず、仲間と一緒に何かすることもできません。母と一緒に買い物やドライブ



にも出かけますが、つまらなくてかえって不機嫌な日も多くなってしまいました。

普通の男の子のように、仕事のあと、飲みに行ったり彼女を作りたいのかなと思うと、多くは叶わないけれど、少しでも楽しい思いをしてストレスを解消して、明日へのモチベーションになるよう願っています。

※まつぼっくり⇒江東ウィズが行なう放課後等デイサービス事業所

☆河内氏 知的障害を伴う身体障害の息子さん（26歳）

今年の夏、息子が睡眠障害のような状態になり、明け方に起き出すことが連日続きました。ひとり親家庭なので、私が働かなければならない状況の中、私自身も寝不足状態が続き、身体的にも、精神的にも疲労困憊でした。緊急一時保護で預かってほしいと、区内の施設に事情を話したのですが、「介護者が病気にならないと、緊急一時保護では預かれない」と言われました。そうなる前に預けたいのにと思いつつ、まつぼっくりに頼むと、すぐに1泊の泊まりで預かってくれ、救われる思いがしました。

この先のことも考え、何かの時にせめて1週間くらいショートステイさせてくれる施設はないかと区に相談し、紹介いただいた施設に見学に行きました。息子は、車いすを動かしたりしてじっとしておらず、大声も出しています。その息子の様子を見て、“大声を嫌う人から他害を受けるかも”などの理由から、「ここでは難しいかもしれない」と言われました。

施設は、手のかかる利用者に対しては受け入れを渋ります。手がかかるからこそ、家庭では大変で受け入れてほしいのにとおもいますが、施設の人手不足などを考えると、そのような“選別”も仕方ないのかなと思ってしまいます。行政は相談にのってはくれますが、手配はしてくれないので、自分で受け入れ先を探していかなければなりません。自分が年老いる前になんとか見つけなければ、という不安を抱えている状態です。

☆ディスカッション

荒井氏 こうなってほしいと思うことは？

川上氏 いろいろな制度が整ってきたといわれるけれど、制度と制度のはざままで困ることはたくさんある。例えば、緊急一時保護も、必要な時すぐに利用できる施設はなかなかない。

まつぼっくりがあって、助けられてはいるが、本当はきちんとした公的な制度がほしい。

河内氏 学齢期は、手厚い支援があったと思う。卒業すると何もなくなってしまう。ヘルパーも利用しているが、夜までは見てもらえないので充実させてほしいし、余暇活動も充実させてほしい。

荒井氏 江東ウィズの事業で、緊急一時保護や青年の余暇活動など、制度のはざまを救うこと



をなんとかやっているが、はたして要望に対応しきれているのかと思う。理事の立場からすると、職員の負担や待遇改善についても考えていかなければいけない。制度も不足しているが、制度があっても支えるのは職員なので、職員が長く続いていかないとまわっていかない。

家平氏 学校卒業後の放デイに代わる余暇活動や、発達保障をしていく活動に対する支援や制度が日本にはほぼなく、昔よりは“母から離れる”ことができているがまだまだ不十分。障害者の生活を誰が支えるかということを考えて時、制度はできてきているけれど不十分。充実させていくには人手が必要。ボランティアや支えを広げていく機会になればと思う。また、福祉に企業が入ってきているという現状もある。全部が悪いわけではないが、営利目的の企業は視点がまるで違ってくる。安上がりにと考えると、人手を削ることになる。実際にそういう事業所も出てきている中で、大変な状況を何とかしようと思ったら、そういう事業所をも利用せざるを得ない状況も出てきている。「人権を守ろう」という事業所を頑張って作っていかないと。深刻な問題。

荒井氏 保護者の方の発言は、言いたいことの1/10くらいのささやかな願い。本当は、自分も子ども、人として生きていくための要求がもっとあるはず。「障害者差別解消法」の「合理的配慮」も、障害者本人や保護者の要求をきちんと捉えられているかという観点から、きちんとできているかを見ていく必要がある。

家平氏 法律ができて良かったが、誰がどう差別だと判断するのかがあいまい。例えば、あるバス会社では、車いすでは乗車できるが、シニアカーは留め金がないからという理由で乗車拒否されてしまう。これなどは、誰が判断するのか、また、いくらでも改善していいこと。こういう問題を、“そういう社会システムでいいのか”と投げかけ、社会理解を広げていくことが大事。理解者が増えていくことが変えていく力になる。

荒井氏 法ができたからよし、というのではなく、中身を良いものにしていくために、声をあげていくことが大事。また、声を出せる状態であることが大事。

◎受講生から寄せられた感想

- ・実際にサービスを受けている当事者の話にもっと耳を傾け、実態を知ることが重要だと思った。本当に必要なサービスを受けられるところがないという現実を国はもっと知って、制度を考えることは出来ないか、国はもっと福祉にお金を使ってほしい。今回参加して、ボランティアの役割の重要性を再確認することになった。
- ・家平さんの言葉にあったが、「国がバリアをなくす必要がある」を心にとめ、制度に目を向けて動いていきたいと感じた。



- ・障害者差別の話は勉強になった。自分も気がつかないうちに差別をしてしまっているのではないかと思った。
- ・生まれつき障害になる人は少なく、生後から障害になる（事故や病気など）人が多いということは他人事ではないと思った。それは、“自分のこととして考え、悩んで、行動してください”ということだと思う。先々のことはみんな分からないけれど、今、自分に出来ることは何なのかを探して行動すべきだなと思う。障害とは何なのか、まだ始めたばかりなのでよく分からないし、考えれば考えるほど分からなくなる。なので、深く考えずに、まずは障害者の方々とふれあうことから始めている。

◆第6回ボランティア講座～2017年度修了式◆

テーマ：『障害のある人もない人も共に認めあい、共生できる社会をつくるために』

第1部 障害者本人（エブリメンバー）からのメッセージ

発言者：松崎浩忠氏、若山真人氏

第2部 障害者の保護者とボランティアによるパネルディスカッション

パネラー：北川幸代氏、高田剛樹氏、梅本美紀氏

コーディネーター：荒井聡氏

2月25日（日）14：00～16：00 江東区文化センター第3研修室

参加者 26名

◎第1部 本人からのメッセージの主な内容

☆松崎氏（22歳）

◇余暇活動の場として「エンジョイクラブ（区が行なう軽度知的障害者の余暇活動の場）」も利用

中学を卒業してから28年、お豆腐屋さん大豆を運ぶ仕事をしています。車の横に乗って、何件も、人形町の方とかにも行きます。仕事のことは、まだそんなに親しくない人には、あまり話したくないです。まつぼっくりの人には話すけれど、トワイライトはあまり回数がなくて会えないので、別のサークルで話しています。

仕事が終わって、家で一杯飲んだり、土日には、知り合いの人がやっているお店で飲んだりします。職場の人とはあまり飲みには行きません。1人で行くこともあります。

エンジョイクラブでは、バンドを組んで、ベースを練習しています。先輩や仲間が、演奏のことや、他にもいろいろなことを教えてくれます。



☆若山氏（22歳）

◇職場は「ワークセンターつばさ（社会福祉法人江東楓の会運営の福祉作業所）」

仕事は、ワークセンターつばさで、荒川河川敷の清掃をしています。ゴミがたくさんあるので大変です。ペットボトルは中身が残っていて臭かったり、自転車が捨てられていたりもします。チームで仕事をします。雨の日は、作業所でエアークッション作りをしたりします。

ボーナスで、自分のトレーナーを買ったり、おばあちゃんにお小遣いをあげたりしました。仕事の後、家でお姉ちゃんとビールを飲むのが楽しみです。

趣味はゲームです。『遊戯王』というゲームにはまっていて、ゲーム大会で、いいところまでいきました。六本木のミッドタウンで、IDカードを作ってやったら、勝ちました。自分の好きなモンスターを出せるところが楽しいです。また、全国大会を目指したいです。ドラゴンボールやワンピースを見るのも好きです。ゲームやカード、アニメなどが好きな人とは、その話しをすれば、子どもでも大人でもすぐに仲良くなれます。

☆ディスカッション

- ・荒井氏 一緒に仕事をしている人で、友達はいますか？
- ・松崎氏 普通に話しはするけど、友達のことには言わない。言ってもわからないから。エンジョイクラブの人には、仕事のことなどを聞いてもらう。いろんな仕事をしている人がいるから。できなかったことも教えてもらってわかるようになってきた。いろいろやろうと思えるようになってきた。楽器をやっている職員に、「途中で諦めないでね」と言われ、1から教えてもらった。こういう人がいるから自分は変わった。
- ・荒井氏 いろんな経験が広がっているね。この先、新しくこんなことをやりたいとか、ありますか？
- ・松崎氏 字が書けないから、トワイライトで練習してみたい。
- ・若山氏 遊戯王に相当はまっている。いろんなテーマがあるから、全国大会に行ってみたい。

◎第2部 保護者とボランティアによるパネルディスカッションの主な内容

▽保護者からの発言

☆北川氏 知的障害を伴う自閉症の息子さん（28歳）

“OB会に補助金を” プロジェクトチーム代表の北川です。

まつぼっくりのOB会アプリは、会費こそありますが、ほとんど職員さんも含めボランティアで成り立つ会です。100名ほど登録しています。江東区の知的障害者が700名ほどですの



で、いかにOBが多いかがわかると思います。

江東区には、青年期の余暇活動を支援するために、ウィズともう1つの団体がOB会活動としてやっています。エブリの前には18歳までの方が利用できる放課後等デイサービスがあります。今、放課後等デイサービスが盛んになってきましたが、それは18歳までです。18歳以降の受け皿はありません。ウィズのOB会活動は、1995年から卒業生の保護者が始めたと聞いています。

江東区では、高校や支援学校を卒業すると、ヘルパーさんに移動支援してもらう以外は、青年期の余暇活動支援としてエンジョイクラブがありますが、対象者に軽度障害者の方とあります。エブリのメンバーに多い重度障害者は入ることができません。私の子どもはエブリ以外では集団で余暇活動を楽しむ場がありません。

エブリでは、子どもたちは現役の時からお世話になっているので、個々の性格や障害のことをわかって頂き、安心して余暇活動に参加できます。しかし、ボランティアの確保や資金問題など様々な問題があり、年数回です。OBが増えていく今後は、回数がもっと減っていくことも想像できます。そのため、数年前からOBの保護者たちが、江東区に直接重度障害者の余暇活動の充実を訴えて参りました。その訴えの一環が協働事業です。私どもの訴えとしてはまだまだ道半ばですが、今日ご参加の皆様にお話を聞いていただける機会をいただいたことは大変ありがたいことと思っております。エブリの活動に実際に参加していただいた方々はどう思われたでしょうか？成人の重度障害者と接してみて。もちろんエブリには軽度の方もいますが、いろいろご苦労されたのではないのでしょうか？今、障害者や高齢者が施設などに入らず、地域で暮らすことを政府が推奨していますが、地域の方を含め、多くの方に知っていただかないことにはそのようなことも夢のまた夢、絵に描いた餅だと思います。

こんなことがありました。土曜日作業所はお休みです。お向かいのおばあちゃんが高齢者施設の車で出かけていきます。その様子を子どもが羨ましそうに見ていました。余暇活動が充実していないことを実感させられた日でした。

親は子どもより先に老いていきます。子どもの余暇活動を充実させていくのは体力的に大変です。うちの子は荒川から隅田川までの距離を歩きます。私も休みの日は一緒に1時間ほど歩きますが、それもいつまで続けられるかわかりません。私は昨年病気のため医師から運動禁止を言い渡され、息子と歩くのは“なるべくゆっくり”が求められていますが、かなり厳しいです。

皆様、私たちの子どものことを知ってください。地域で暮らしていくために知ってください。地域で暮らしていくために障害者の余暇活動が充実したものになるよう、私たちと一緒に考えてもらえませんか？



▽ボランティアからの発言

☆高田氏 まつぼっくり子ども教室ボランティア

大学1年の時に、友達の紹介でまつぼっくりに関わり、大学2～4年までアルバイトをしました。それまで、福祉とは無縁でしたが、卒業して就職してからも、ボランティアとして関わり、9年関わっていることになります。

自分にとって、ボランティアとは？ということで、4点挙げたいと思います。

1つは、子どもたちの人生を豊かにし、いろいろな経験をさせたい。楽しい思い出をつくってほしいと思います。2つ目は、大学4年間、楽しいことではなかったけれど、いろいろな思い出をくれた子どもや保護者に恩返しをしたいということです。3点目は、今の自分があるのも、ボランティアがあったからー。原点だと思っています。4つ目は、子どもだけでなく、保護者、スタッフも含め、出会いたなと思います。

☆梅本氏 さくらんぼ子ども教室ボランティア

ボランティアをしようと思ったきっかけは、発達障害をもって生まれた甥や、難病で長くつらい思いをしていた友人など、身近なところに困っている人がいたものの、どうしてよいかわからず、何もできていなかった自分をなんとかしたいと思っていたところ、いろいろ学ばせていただけそうに思えた「さくらんぼ」のボランティア募集記事が目にとまったからです。

けれども、活動に参加し始めてすぐに、「慣れない大勢の人と接することが苦手」「集団行動が苦手」等々という数々の苦手意識が失敗の悪循環を起し、「私はこの人たちに迷惑をかけるにきているだけなんじゃないか？」という疑問にぶち当たりました。それでも、「ここで辞めては迷惑をかけるためだけに来たことになる」と思い直し、関わるうちに、10年以上経っていました。今もまだ、「本当に役に立っている」のかわからず、だから辞められないと思っています。

私自身の世界が広がりました。いろいろなことを経験し、学び、収穫がありました。30代からでも、新しいことが学べるんだと思いました。これは、どの障害者施設にも言えることではなく、ウィズだからこそその部分だと思います。そうやって学ばせていただき、恩返ししたいと思い、また学び…と循環しているように思います。

☆ディスカッション

北川氏 息子の下に兄弟が3人いて、小さい頃、ベビーシッターを利用していた。自分の体調が悪い時にも、ほぼ無償で来てくださったりし、「こんなに良くしていただいて、どうしたらいい？」と聞くと、「次の世代に何かしてあげたら？私に返す物はないわよ」と



言われた。それで、今は、自分がしてもらったことを誰かにという思いで、団地に住んでいた時は、子どもの預かりをしたり、今は高齢者の家の雪かきをしたりしている。

荒井氏 息子さんのエブリに参加しての楽しみ方や変化を具体的に。

北川氏 電車やバスに乗ると、知らない人のストラップを引っ張って壊してしまったりしていたので、エブリの日も車で送迎していたが、夫の単身赴任を機に、電車やバスで行くように。初めは、駅などで怖くて手が離せなかったが、エブリだとわかるようになると、ニコニコしながら行くようになってきた。「周りを見て」と言うと、頷いてダッシュしていく。作業所への通所も、バスが使えるようになってきた。

荒井氏 先程の松崎さん、若山さんからも、仕事のことを聞き出そうと思ったが、なかなか出てこなくて、趣味の話が多かった。遊びのために、頑張っている仕事をしているのかも。“楽しい”って大事だなと思った。ボランティアをしている2人からは、奇しくも“恩返し”という言葉が出てきたが、その辺りをもう少し詳しく。

高田氏 原点と先程言ったが、大学では農学部で、福祉に関わるのは初めてだった。初めて行った時は、思ったよりも障害が重いと感じた。会話はできるのかなと思ったができないし。でも、思った以上にかわいいと思った。電車などで障害者を見かけた時は、声を出したりして怖いと思っていたが、まっぼっくりの子はよく笑って、かわいい。

梅本氏 “ボランティアをしたい”ではなく、“自分自身のモヤモヤを何とかしたい”という思いで、インターネットで調べた。手が止まったのがさくらんぼだった。誰かのためより自分のために関わった。納得できたらもうやっていないが、やればやるほど、障害者本人ではなく、周りの問題だという思いが増えてきた。小学生の時も、知的障害の子がいて、気になっていた。表現できなくても、言いたいことはあるのでは？と思っていた。障害者への見方は変わっていないが、自分自身の人生が変わってしまった。視野が狭かったのが、もっと周りが見えるようになった。外に出た時の開放感があり、自分の生活が豊かになった。

荒井氏 ボランティアというと、一方的に奉仕するというイメージがあるが、相互に得る物があるのは素晴らしいと思う。それぞれが生きてきた中でいろいろな経験があると思うが、自分の狭いエリアから、ボランティアという普段と違う広がりを感じてくださっている。それぞれが、自分なりのメリットや意味を感じてくれているので、長く続けていただいていると思う。最後に、こうなったらいいなということがあれば。

梅本氏 いくつかウィズ以外の施設の活動にも参加したが、全然違ってつまらなかった。ウィズの活動は、チャレンジすることがたくさん。障害のあるなしに関わらず、人はチャレンジしなければならない。こういう活動をもっと外の人にも知ってもらいたい。



- ・高田氏 ボランティアする人がもっと増えてくれれば。
- ・北川氏 子どもが小さい頃、年上の子がみんな大きくて怖かった。障害のある子を育てていてもそう。知っていくことで解消される。私は、ピアノを弾くのだが、演奏すると、障害のある子たちもじっとして聴いてくれる。保護者としてもだが、いろいろと関わっていきたい。

☆まとめに変えて～荒井氏の発言

まとめに変えて、はっきりしたことを3点挙げたい。1つは、障害のある方も、社会人として、仕事は糧であるけれども、“楽しむことがあるから働いている”ということ。だれでもみんなそうだなということがわかった。2つめは、ボランティアというと、奉仕という一方的なイメージがあるけれども、双方にメリットや意味があるということ。世代を越えて“返していく”ことが、社会全体の思いやりになる。3つ目は、“障害のある人を理解し、共に生きる”とは？について。障害や違いを見つけるのではなく、“人として知る、同じ人として生きていく”ということを知ることだということがわかったのではないか。

◎参加者からの感想

- ・障害者本人からの話を聞いてとても良かった。やっぱり余暇って誰にでも必要なんだと思った。余暇を楽しく過ごすからこそ、仕事もがんばれると改めて思った。保護者の話も良かった（余暇を楽しむ場所がどれだけ必要なのか、その場所を作るためにどんな活動をしているのかなど）。この講座が、来年も、ずっと続けばいいなと思った。
- ・あっという間に今日が最後というのが正直な気持ち。ボランティアって何だろうと問いかけてもなかなか浮かんでこない。参加してみて、あれもこれもわかるというのでなく、これから、1つ1つクリアしていけばいいのかなという気持ち。松崎さんは、音楽が好きということだったが、趣味を通して人とコミュニケーションできる。相手も自分も楽しくなる。これが一番大事だと思う。来年も頑張りたい。
- ・作業所の職員。青年期の余暇活動は、エンジョイクラブしかなく、軽度の方に限られている。重度の方にも必要。来年度の協働事業もできるだけお手伝いしたい。障害者と初対面だとどうしても構えてしまう方が多いと思う。雑用など、直接関わるだけではなく、いろいろな関わり方があることもアピールしていけたらいいのでは、と思う。



イベントの開催

◆ウォークラリー◆



日時：11月19日(日)9:15~17:15

集合：猿江恩賜公園時計塔前広場

解散：ティアラこうとう中会議室

内容：10km・15km・20kmの3コースから選択して参加。チームごとにクイズを解いたりしつつ、歩く。昼食は、全員小松川公園にて(豚汁の振る舞い)。途中、おやつ休憩2回、他休憩4回。事前の企画会議で出された意見(コース途中で、土地や建造物等にちなんだエピソードやクイズを出し、楽しみながら歩けたら)を取り入れる。

参加者：90名(含む：受講生5名、看護師2名、
協働事業担当者3名、チーム引率等要員11名)

◎参加者へのアンケートから(回答数23)

①今回のウォークラリーを何で知りましたか? 複数回答あり

さくらんぼやまつぼっくりに掲示されたポスター(8)

区報(1)

作業所やグループホームなどのポスター・チラシ(4)

江東ウィズ会員からの誘い(10)

その他(2 企業社内のイントラ、等)

②このような企画があったら、また参加したいですか?

ぜひ参加したい(18)

内容によっては参加したい(4 ウォーキング・前半だけとか後半だけ、等)



◎参加者から寄せられた感想

- ・今回9～17時だったが、10～16時くらいにしてほしい。
- ・朝、寒かったけど、お天気も良く、豚汁もおいしかった。目標どおりゴールできて良かった。スタッフの皆様、お疲れ様でした。小話が良かった。
- ・豚汁とてもおいしかった。寒かったので、特に！
- ・ポイントごとに、きめ細かい気配りが素晴らしかったと思う。スタッフの皆さん、ありがとうございました。
- ・あまり長い距離を歩いたことがないので、良い経験になった。寒さ対策も考えないと。
- ・親子で頑張った。ありがとうございました。
- ・「きめ細かな配慮」素晴らしかった。
- ・スピードが速くてついていけず、ご迷惑をおかけしました。申し訳ありませんでした。
- ・散歩して頑張りました。良かった。
- ・子どもが意外と体力があることに気づけて良かった。次回に向けて目標ができた。
- ・休憩にお茶やお菓子があるのは嬉しいが、休憩が長く、寒かった。

◆クリスマスコンサート◆



◀ ミュゼ・ダール吹奏楽団、受講生、大江戸高校の高校生、ボランティア、エブリメンバーとの記念写真

日時：12月23日（日）13：45～15：00

会場：都立大江戸高等学校

内容：ミュゼ・ダール吹奏楽団（49名）を招いてのコンサート。

曲目は、クリスマスメドレー、嵐メドレー、ザ・ドリフターズメドレーなど。

参加者：204名（エブリの活動として参加した青年53名、受講生6名、

ボランティア41名、一般参加者99名、協働事業担当者5名）



◎参加者へのアンケートから（回答数29）

①今回のクリスマスコンサートを何で知りましたか？ 複数回答あり

さくらんぼやまつぼっくりに掲示されたポスター（10）

作業所やグループホームなどのポスター・チラシ（3）

江東区の掲示板に掲示されたポスター（7）

区報（4）

江東ウィズ会員からの誘い（5）

その他（2）（知人から聞いて・通りすがり）

③このような企画があったら、また参加したいですか？

ぜひ参加したい（29）

◎参加者から寄せられた感想

- ・とても楽しくて、会場の方々もとても楽しそうで、素敵でした。
- ・楽しいコンサート、ありがとうございました。
- ・娘が車いすで、今までコンサート等に参加したことがありませんでした。表情も良く、楽しんでいたようです。ありがとうございました。ドリフが特に楽しかったです。
- ・本当にとっても楽しかったです。また来年もぜひ来たいです。
- ・演奏ももちろんですが、細かい演出が素敵で、芸もおもしろかったです。
- ・懐かしい曲もあり、よかった。
- ・子どもから大人までとても楽しめた。
- ・嵐メドレーがよかった。歌ったり、踊ったり、楽しかった。
- ・いろいろ工夫がされていて、とてもよかったです。演奏も素敵でした。
- ・リラックスして楽しめました。
- ・通りすがりで、ちょっと聞いていこうかと。思いがけず素晴らしい演奏と、自由な空間で、感動しました。ありがとうございました。
- ・皆さん、楽しく、良いコンサートでした！ありがとうございました。



江東区協働事業提案制度 平成29年度実施事業
江東区区民協働推進会議委員意見書

事業名	地域障害者交流事業さるえ（2年事業・1年目）		
団体名	一般社団法人江東ウイズ		
担当課名	障害者支援課	関係課	—
事業費 （予算額）	1, 043, 986円 （1, 024, 000円）	行政	950, 000円
		団体	93, 986円

◆ 江東区区民協働推進会議 委員意見 ◆

- ・本事業のテーマである障害への正しい理解の促進と、障害者とともに活動するボランティアの育成は、2020パラリンピック開催に向け、また、ともに認め合い、共生できる社会を目指すうえで、時代の要請に沿った、重要な取り組みであると評価できる。
- ・健常者と障害者との交流が事業目的のひとつと捉えれば、1年目の事業結果としては良好であったと評価する。
- ・事業実施に当たっては、団体と行政との間で、課題に取り組むうえでの目標の共有が十分とは言えず、また、若干の認識の差があったように思われる。
- ・ボランティア講座への継続参加者が少なかったことは、障害に関わる人材を集めることの難しさを表していると思う。2年目の事業実施に向けては、より積極的な参加を実現させるため、講演会の切り口や広報のしかたを工夫するなど、多くの人に興味を持ってもらう努力が必要である。また、無関心層への働きかけを明確に位置づけ、より良い効果を生み出すための活動の広がりを目指したい。
- ・ボランティアの担い手となる高校・大学・専門学生への普及啓発だけでなく、小・中学生に障害を知る機会を設けてもよいのではないかと考える。こどもは順応性が高いので、受け入れること、寄り添うことを学ぶ教育ができるものと考えている。
- ・今後、事業を推進していくためには、他の地域団体（町会、民生委員など）の協力や行政の内部組織（教育委員会など）との連携など、活動の輪を広げていくための創意工夫が必要である。
- ・行政が解決すべき課題ではあるが、短期間で目標達成できるテーマではないと思われることから、団体は、事業継続性の視点から、事業への取り組みを行政とともに検討する必要があると考える。
- ・1年目の活動を通じて得た経験と反省を活かし、地域共生社会の実現に向け、協働による相乗効果を更に発揮した2年目の事業実施に期待したい。

◆ 江東区区民協働推進会議 総合意見 ◆

誰でもが地域で安心して生活をしていける共生社会をめざして、障がい者を正しく理解することを目的に、企画・実践した今回のプログラムについて、2020年パラリンピックの開催地域としてもタイムリーな企画として評価できる。

今回のプログラムの1つである連続講座は、単なる座学だけではなく、イベントへの参加を含めた実践を踏まえての講座を実施している。それはより実態に沿うものと言えるとともに、参加者の講座への出席状況等からみても関心度が深いことが推察される。また、ウォークラリーやクリスマスコンサートなどのイベントは多くの区民に楽しく気軽に参加してもらい、障がい者問題を広く知らせる機会だけに、情報提供の工夫が一段と必要かと思われる。それだけに行政との密なる連携が一層重要になると思われる。

講座やイベント等のプログラムへの理解促進を図る対象として、中学生・高校生・大学生などの若年層を考えていくことを計画しているとすれば、時間、活動内容をはじめ工夫が必要と思われる。と同時に、若年層の主体的参加ができるプログラム作りが今後に向けての課題と言える。

このプログラムは行政と団体との協働事業であるが、双方との共通目標とプロセスが必ずしも一致しているとは見受け難く、役割分担を含めた確認が再度必要と思われる。また、障がい者の問題を理解、促進を図る上では、コミュニティとの連携は欠くことはできない。行政との協働はもとより地域社会との連携を踏まえた協働をこの機にさらなる密にしていくことを期待するところである。

この活動は短期間で解決できるものではなく中長期的に考えていく必要であるだけに、団体の基盤強化を含めた運営が望まれる。